4・4 祝学館解放大集会へ

新たなる早大斗争は、今産声をあげようとしている。我々の生を根元から捉えなおす斗争が、、、、、、。

我々は、7集会以来、一貫して叛逆のイメージを追求してきた。我々にとって叛逆とは何か？ その実質が我々の語るべき言葉であり、我々の創出すべき運動であった。我々はそのイメージが次第に我々自身の言葉で語られ、我々自身の創造運動が定着しつつあることを確認する。我々は、実質的な反体制運動の一環として登場した3・25卒業式斗争及び4・1 **早稲田番外地集会** において、勿論不備な点は無数にあったにせよ、原則的には成功であった事実を確認する。ここで我々は3・25、4・1斗争を総括した上で、今后の斗争の展望を明確にすることを試みる。その中で現在の大学とは一体何であるかの輪郭が浮かび上って来るだろう。卒業式斗争において我々が為すことを欲したのは、我々自身の主体的力量のなさを明確に自己批判することだった。早大斗争が敗北して以来、我々は期待される人間像の中に組みこまれ、卒業式というセレモニーに巻きこまれざるを得なかった。

卒業式とは 一体何であるか。資本の論理に貫徹された人間像を押しつけ、社会へ送りこむセレモニーでしかない。我々自身がそれまで卒業式というセレモニーをしか捉えることができないのだ。病を抱いて、空虚なる感覚を味わうのみに持って、せめてもの花むけとしての行動を起こしたのだった。これが我々の卒業式斗争の意味であったことを確認する。

次に我々が **4・1早稲田番外地集会** を行った意味を再度確認しておきたい。

早稲田番外地とは何か？ 東大斗争・日大斗争が明確に管理社会への叛旗として **新次元の情況** を切り開いた中で、我々のワセダは、休火山でしかなかった。我々は同じ斗う意志を持つものとして、我々の偶然的ではあるが絶対的基盤であるワセダにおいて、連帯する斗いを組みえなかった我々自身を否定する斗いの一環として4・1ワセダ番外地集会をもった。我々が番外地としてワセダを捉える場合には、東大・日大の斗争に対しての精神的苦痛を感じとらえる我々であることを確認する。

その中で我々は、明確に三年間の空白としてワセダの一階を占めている **十一階だての空間** に対して、これは我々に対して斗いを挑む方向を提起した。我々にとって学館とは何であったか、そして現在それを持つ学館そのものに異議を申したてる。学館はサークルにとって如何なる意味を持っているか？ 我々はサークルの拠点としての学館を徹底的に粉砕することを宣言する。学生会館をそのものとして捉え、単なるモノ取り競争に終始する運動を破壊して、学館を反体制を志向する創造学部に、真の意味の反大学に設定することを提起する。我々は **学生厚生体制** の中に埋没する歪小な学館のイメージを破壊して、サークル自体の運動と創造学部に、自己完結するような運動を解体し、サロン的サークルを壊滅させ、我々の自主的な、そして自由な討論の場を創り出すことを宣言する。我々は **サークル運動** を捉えることはできない。サークル運動をのりこえた上で、我々はサークルを解体し、我々自身の反大学を設定することを明確に試みる。その情況の中で我々は、学部の空虚な教育内容と対決していく方向を持ちうるのではないだろうか。我々が切り開いた **新しい運動の中で** しか学館斗争に対する明確な方向性を得ることはできない。我々は我々のイメージを外化するために11階だての空間を占拠する。最后に我々は、我々のイメージを圧殺しようとする行動を徹底して斗う中で粉砕するだろうことを断言して、反戦連合からのアピールを終る。

第2学館を 創造学部に 反大学に

蜂起 No.3

早大反戦連合

緑色戦線より